

広報

あしや

941号

令和元年 (2019)

11月1日



稲刈り体験

寄添者^{よそもん}ですが何か!?

よそもん
寄添者とは、「人」に「町」に「心」に寄り添いたい者という意味です。

芦屋町地域おこし協力隊卒業後の寄添者コーナー。今年度は、芦屋町に魅せられ引き寄せられた皆さんに、寄添者視点からの魅力などをうかがっていきます。

▷問い合わせ 広報情報係

(☎223局3569)

町のビッグイベント、砂像が取り持つ縁で…

芦屋町が平成7年から行ってきた「砂浜の美術展」が一時休止を乗り越え、26年、「あしや砂像展」として復活し、今年で6年目を迎えました。砂像展にはプロデューサーや海外アーティストなど町内外の多くの皆さんに支えられていますが、今回紹介する2人の女性、豊福寛子さんと廣岡佳さんは、砂浜の美術展から参加し、キャリアを積んできた寄添者です。当時の2人は九州造形短期大学（現九州産業大学短期大学部）のクラスメイトで、粘土や彫刻などさまざまな分野の造形を学んできた腹心の友です。



今年は1人で参加の豊福寛子さん
芦屋砂像連盟所属

芦屋の砂像とともにあった2人の青春

砂像との出会いは15年、大学の課外授業で参加した砂浜の美術展。初めての砂像制作ですっかりとりこになった2人は「とにかく楽しい」と口をそろえます。ともに大学在学中に芦屋砂像連盟へ加入し、卒業後は各地の砂像展にも参加してきました。砂像制作の魅力を尋ねると、「微細なのに大胆な素材、気持ちがあせると壊れてしまう。修復は大変だが、形になると達成感があり、太陽の方向で作品の陰影に変化があるなど飽きることがないところ」と豊福さん。ともに過ごした2人の16年間、いつしか2人の腕には趣味以上の実力が蓄積されていました。

夢は世界に通用するプロの道

砂像展のプロデューサーや海外アーティストからも影響を受け、一流彫刻家が挑む壮大なテーマと立体感や遠近感を計算しながら作られた作品群にさらに心を奪われます。

今年の夏、赤ちゃんが誕生した廣岡さんは、「プロに刺激されて制作意欲がとまらない。彫刻を始めると一点集中して没頭しているが、気持ちは楽しくて仕方ない。今年は参加できなかったが来年は絶対に作りたい」と、うずうずした気持ちを話してくれました。

近い将来、芦屋砂像連盟から海外でも活躍するプロの作家誕生を心から願っています。



△30年制作 豊福さん（後）と廣岡さん（前）



△29年制作 京都祇園祭



△28年制作 スペースシャトル

編集後記

▼日本中で盛り上がりつつあるラグビーワールドカップも残すところ決勝戦のみとなりました。私が小さい頃はマイナー競技として一部熱狂的なファンを除き、日本国内での知名度がイマイチだったと記憶しています。4年前の活躍に始まり、今大会は日本開催に加えて史上初のベスト8という結果もあり、日本中がラグビー熱気に包まれました。砂像展会場でもコンテスト参加者が製作している砂像を見た子どもが「ラグビーボール」と気づいてくれたことにうれしくなりました。

▼10月から広報の担当になりましたが、自分が編集側の担当になるとは思ってもみませんでした。これまでとは違い、作る側として文章を読み、分かりやすい紙面作りを心がけていきたいと思っています。町に出て、取材をすることもあると思いますので、見かけた際には気軽に声をかけてくれるとうれしいです。

（谷岡）
▼台風19号が日本を襲いました。台風のリートは九州から反れ、無事砂像展を開催することができましたが、佐野市などの多くの人が被災されました。27ページに募金への案内を掲載しています。ご協力をお願いします。

（鍛守）
この広報は、再生紙を使用しています。